

## シェイクスピアにおける句と節

田 中 實

### Phrases and Clauses in Shakespeare

Minoru Tanaka

はじめに

拙論ではシェイクスピアにおける句 (phrases) と節 (clauses) を分析・検討する。英語の文構造を考察する場合に、句 (phrase) は1語ではなく2語以上から成り、文中において主語と述語動詞をそなえていないものをいう。これに対し節 (clause) には主語と述語があるので、その意味で句は単純な構造の語の集まりである。したがって、句は語より大きく節より小さな単位ということになる。変形文法では名詞句 (noun phrase) という場合にその内部に主語+述語の関係があるものを含めているので注意を要する。her life は句であるが、she lived (主語+動詞) は節である。したがって、語に8品詞があるように、さまざまな句構造、(代)名詞句や形容詞句、副詞句がある。

次にシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*, 1594-95) から先ず英語の句の要点を述べる。

1. (代)名詞句 I was *your mother* much upon *these years*

That you are now *a maid* (*Lady Capulet*, p.103)<sup>(1)</sup>

1. では *your mother* や *these years*, *a maid* が名詞句である。

2. 形容詞句 ..., and we be *in choler*, we'll draw. (*Sampson*, p.82)

2. では *in choler* が *in anger* の意味の形容詞句である。

3. 副詞句 ..., and therefore women, being the weaker

vessels, are ever thrust to the wall: (*Sampson*, p.83)

3. では, *being the weaker vessels* が分詞句であり、いわゆる分詞構造 (participial construction) である。

さらに、前置詞句という呼び方がある。例えば、Many a morning hath he been seen, With tears augmenting the fresh morning dew, ... (*Montague*, p.88) では、前置詞 With で始まり dew まだが句をなしている。この前置詞句は文中で機能的には付帯状況を表わす副詞句の働きをしている。また、接続詞句 (群接続詞) としては、例えば、And if you leave so, you do me wrong. (*Benvolio*,

p.91) では、And if 2 語で 1 語の接続詞 if の意味でシェイクスピアはよく用いている。間投詞句としては、例えば、Where shall we dine? *O me!* What fray was there? (*Romeo*, p.90) では、*O me!* は *O dear!* と同じく「おやまあ」という意味である。不定詞句としては、例えば、Bid a sick man in sadness make his will? (*Romeo*, p.92) では、make his will が 1 つの不定詞句である。そしてこの不定詞の意味上の主語は a sick man である。不定詞つき対格構文の一種であり、この場合、述語動詞 (predicate verb) が bid なので、make は to なしの不定詞 (bare infinitive) となる。bid は今日では古風 (archaic) で文語的 (literary) である。動名詞句としては、例えば、So shall you share all that he doth possess, By *having him*, making yourself no less. (*Lady Capulet*, p.104) では、前置詞の By の目的語に動名詞句 having him をおいている。動名詞 (gerund) は動詞を名詞的に転換使用している。この場合、having が他動詞性を保持していて having の目的語として人称代名詞 him (目的格) をおいている。さらに前置詞句 By having him は副詞句として機能し、主文 So shall you share all that he doth possess を修飾している。この動名詞は前置詞 By の助けによって By の目的語になり、文拡大に寄与している。分詞句としては、例えば、*Being but heavy* I will bear the light. (*Romeo*, p.106) では左側派生 (left branch) の分詞構文として Being but heavy は機能している。分詞句であっても次の例、Is there no pity *sitting in the clouds* that sees into the bottom of my grief? (*Juliet*, p.195) では、-ing 形の sitting (=that sits) が直前の名詞 pity を後置修飾している。sitting は分詞形容詞的用法である。

次にシェイクスピアが用いた英語の節構造についてその要点に触れておく。英語の節は重文または複文中において主語と述語をなす部分のことである。

1. 重文中の節 Love give me strength, and strength shall help afford. (*Juliet*, p.201) では、等位接続詞 and を境にしてその両側に節構造をおいた文である。
2. 複文中の節 Now when the bridegroom in the morning comes to rouse thee from thy bed, there art thou, dead. (*Friar Lawrence*, p.200) では、when 節は副詞節として there art thou, dead を修飾している。
3. 名詞節 And let the Nurse this night sit up with you, for I am sure [that] *you have your hands full all in this so sudden business*. (*Juliet*, p.204) では、等位接続詞 for のあとに先ず主節 I am sure をおき、ついで名詞節 *you have your hands full all in this so sudden business*. を従節としておいている。例えば I am afraid that he is ill. のごとく従位接続詞 that のあとに節構造を埋め込んで (embed) いる。
4. 形容詞節 I have a faint cold fear [that] thrills through veins, *that almost freezes up the heat of life*. (*Juliet*, p.204) では、thrills through veins は接触節 (contact clause) であり、thrills の直前に関係代名詞 that を導入することができる。また almost の直前の that は関係代名詞であり先行詞を fear とする形容詞節を導いている。動詞 thrill は、Fear thrilled through her veins. のように用いる。

5. 副詞節 To move is to stir, and to be valiant is to stand : therefore *if thou art moved* thou runn'st away. (Gregory, p.82) では, if 節 (条件節) が副詞節として主節 thou runn'st away を修飾している。

以上シェイクスピアの用いた文 (sentence) の内部構造としての句と節を概説してきたが, 以下, 『ロミオとジュリエット』 (Romeo and Juliet, 1594-95) の英語表現を素材として, さらに詳細に句 (phrase) と節 (clause) を分析・検討していく。

## (A) 句

### 1 (代)名詞句

(1) *Sampson. My naked weapon is out. Quarrel, I will back thee.* —ACT I, sc. I, l.33.

(1)では My naked weapon が名詞句で, 主語 (もしくは主部) となっている。狭義では名詞 weapon のみが主語である。My naked weapon における直接構成素は限定詞 (determiner) の My と主要部 naked weapon から成り, 主要部がさらに限定的形容詞である naked と主要語 weapon とに分かれる。そして weapon は普通名詞 (common noun) である。

(2) *Romeo. What is it (=love) else? A madness most discreet, A choking gall, and a preserving sweet.* —ACT I, sc. I, ll.191-92.

(2)では不定冠詞で始まる名詞句を 3 つ羅列している。これは「恋とは何か」に対する断片句 (fragmentary phrase) による自問自答である。

(3) *Lady Capulet. This precious book of love, this unbound lover, To beautify him only lacks a cover.* —ACT I, sc. III, ll.87-88.

(3)では This で始まる 2 つの句が名詞句であり, 文頭の This precious book of love が主語でその同格語 (appositive) として this unbound lover をおいている。

(4) *Nurse. Her mother is the lady of the house, And a good lady, and a wise and virtuous.* —ACT I, sc.v, ll.113-16.

(4)ではまず定冠詞 the で始まる名詞句 the lady of the house を主格補語 (subjective complement) におき, and で結び, 次いで不定冠詞で始まる名詞句 a good lady を同じく補語におき, さらに同じ資格で名詞句 a wise and virtuous [lady] をおいている。

(5) *Juliet. What is your gentleman? Nurse. The son and heir of old Tiberio.* —ACT I, sc.v, ll.127-28.

(5)では Juliet が CVS の正規の疑問文で尋ねる。これに対し, Nurse は名詞句のみで, つまり断片文 (fragmentary sentence) で答えている。完全文 (full sentence) にすれば, *He is the son and heir of old Tiberio.* となる。

(6) *Nurse*. His name is Romeo, and *a Montague*,

*The only son of your great enemy*.

—ACT I, SC. V, ll.135-36.

(6)では補語 *Romeo* と同格に 2 つの名詞句 *Montague* と *The only son of your great enemy* をおいている。同格語は 2 つまたは 3 つ並べるのが常である。

(7) *Benolio*. Go then, for 'tis in vain

*To seek him here that means not to be found*.

—ACT II, SC.I, ll.42-43.

(7)では不定詞句 *To seek ... found* は仮主語 *it* に対して真主語となる名詞句である。不定詞句が長い場合後置の方がバランスのとれた文となる。

(8) *Romeo*. I know not how to tell thee who I am:

—ACT II, SC.II, l.53.

(8)では他動詞 *know* の目的語に疑問詞 *how* 句 (*how to tell ... am*) をおいている。不定詞 *tell* の目的語として、さらに間接疑問節をおいている。

(9) *Romeo*. It were a grief so brief to *part with thee*.

—ACT IV, SC.III, l.173.

(9)では予備の *it* 対真主語の不定詞句 *to part with thee* の構文である。3 人称単数代名詞 *it* に複数形 *be* 動詞 *were* を用いた仮定法過去の構文である。*it-be* 構文の補語に名詞をおき判断・批評をしている。結論を先に言う構文である。補語には形容詞がくることが多い。

(10) *Juliet*. Is it more sin to wish me thus forsworn

*Or to dispraise my lord with that same tongue*

*Which she hath prais'd him with above compare*

*So many thousand times ?*

—ACT III, SC.V, ll.236-39.

(10)では予備の *it* 対 2 つの不定詞句 (= 名詞句) を真主語 (*to wish ... forsworn ; to dispraise ... times*) とした構文である。主語が長い場合、後置の方が構文として前位過重 (*front-heavy*) にならないので一般に好まれる。

(11) *Juliet*. If I do so (=confess), it will be of more price

*Being spoke behind your back than to your face*.

—ACT IV, SC.I, ll.27-28.

(11)では予備の *it* に対し動名詞句 (= 名詞句) *Being spoke ... face* を真主語としている構文である。*Being spoke* が受動態動名詞であり、この動名詞を副詞句 *behind your back* と *to your face* が修飾して長めの動名詞句を創出している。

(12) *Balthasar*. O pardon me for *bringing these ill news*,

*Since you did leave it for my office, sir*.

—ACT V, SC.I, ll.22-23.

(12)では前置詞 *for* の目的語として動名詞句 *bringing these ill news* をおいている。*pardon ~ for* の形で用いるが、前置詞 *for* + 動名詞句で副詞句として機能し動詞 *pardon* を修飾している。動名詞 *bringing* はこのように他動詞性を保持し、*bring* の目的語 *these ill news* をおいている。現代英語でも例えば、*Pardon me for interrupting you*. とか、*Pardon me for bothering you* のごとく会話で用いる。

(13) *Paris*. The obsequies that I for thee will keep

Nightly shall be to *strew thy grave* and weep.

—ACT V, SC.Ⅲ, ll.16-17.

(13)では不定詞句 to *strew thy grave* と不定詞 *weep* の2つが主格補語の名詞用法である。shall beの主語が生物主語 (animate noun)ではなく、抽象概念であることから、この不定詞句は主格補語の名詞用法と考えられる。

(14) *Friar Lawrence*. Came I to take her from her kindred's vault,

Meaning to *keep her closely at my cell*.

—ACT V, SC.Ⅲ, ll.251-55.

(14)では他動詞 Meaning の目的語に不定詞句 to *keep her closely at my cell* をおいている。さらに、Meaning to *keep* ～ cell で、付帯状況を示す分詞構文 (副詞句) として機能している。

(15) *Prince*. And I, for *winking at your discords too*,

Have lost a brace of kinsmen.

—ACT V, SC.Ⅲ, ll.293-94.

(15)では動名詞句 *winking at your discords too* を前置詞 for のあとにその目的語としておいている。for で始まる前置詞句は主語と述語との間の中間派生 (mid-branch) の副詞句として他動詞 *lost* を修飾している。

## 2 形容詞句

(16) *Sampson*. A dog of the house of Montague moves me.

—ACT I, SC.I, l. 7.

(16)では前置詞 of に始まる形容詞句を2つ用いている。2つ目の of に始まる形容詞句 of Montague は名詞 house を後ろから修飾している。さらに、いっそう長い形容詞句 of the house of Montague が生物名詞 (animate noun) dog を修飾している。したがって、A dog of the house で句を形成する統語関係ではない。the house of Montague が前提となる意味単位を成しているからである。このように、of 句の反復は2回程度であり、3回となることは少ない。

(17) *Romeo*. ... ye have dancing shoes

With *nimble soles* :

—ACT I, SC.IV, ll.14-15.

(17)では With で始まる前置詞句が形容詞句として機能し、With *nimble soles* は *dancing shoes* を後ろから修飾している。前置詞で始まる形容詞句は後ろから修飾するのが特徴的である。

(18) *Juliet*. My bounty is *boundless as the sea*,

—ACT II, SC.II, l.133.

(18)では形容詞 *boundless* のあとに副詞句の直喩 as the sea をおき、1つの形容詞句を形成し、*boundless as the sea* が主格補語となっている。as the sea がなくても補語は *boundless* だけで成り立つが、as the sea を喩えとして加えることによりイメージが鮮明になり説得力を増す。

(19) *Nurse*. There stays a husband to *make you a wife*,

—ACT II, SC.II, l.170.

(19)では不定詞句 to *make you a wife* が人間名詞 (human noun) husband を機能的に修飾する形容詞句である。husband は倒置構文の自動詞 (intransitive verb) の主語になっている。

(20) *Capulet*. Things have fallen out, sir so unluckily

That we have had no time *to move our daughter*.

—ACT III, SC.IV, ll.1-2.

(20)では不定詞句 *to move our daughter* を抽象名詞 (abstract noun) *time* 修飾の形容詞句として用いられている。

### 3 副詞句

(21) *Citizens*. ... *Down with the Capulets! Down with the Montagues!*

—ACT I, SC.I, ll.71-72.

(21)では *Down with the Capulets* という副詞句を1つの独立文として用いている。構造的には副詞 *Down* + 前置詞 *with* + 名詞の形式である。副詞句ではあるが命令法に相当する断片文 (fragmentary sentence) である。これは現代英語においても *Down with the tyrant!* (暴君打倒!) とか *Down with the grammarians!* などと用いる。

(22) *Benvolio*. Have you importun'd him *by any means*?

*Montague*. Both *by myself and many other friends*.

—ACT I, SC.I, ll.143-44.

(22)では前置詞 *by* + (代)名詞 (句) から成る副詞句により語用論 (pragmatism) 的にコミュニケーションを果している。*Montague* はこうして断片句 (fragmentary phrase) のみで答えている。完全文 (full sentence) でない方がかえって自然な英語表現なのである。

(23) *Mercutio*. And in this state she gallops *night by night*

*Through lovers' brains*, and then they dream of love;

—ACT I, SC.IV, ll.70-71.

(23)では慣用句としての副詞句 *night by night* が動詞 *gallops* を後ろから修飾し彩りを添えている。また副詞句 *Through lovers' brains* も動詞 *gallops* を修飾している。*gallop* は隠喩表現である。さらに副詞句 *of love* は自動詞 *dream* を修飾している。動詞句 *dream of* と考えれば、これは他動詞相当語句とみなせる。こうして、この *Mercutio* は短い発話 (utterance) 中に副詞句を多用し、活気のある表現をしている。

(24) *Mercutio*. Appear thou *in the likeness of a sigh*;

—ACT III, SC.I, ll.8-9.

(24)では副詞句 *in the likeness of a sigh* は比喩 (隠喩) 的に自動詞 *Appear* を修飾している。

(25) *Benvolio*. Come, he hath hid himself *among these trees*, To be consorted *with humorous night*.

—ACT II, SC.I, ll.30-31.

(25)では場所の副詞句 *among these trees* は他動詞 *hid* を修飾している。動詞 *hide* はその意味から場所を示す語句を伴う。これら2つの副詞句により夜の暗闇のイメージをありありと描出している。*Benvolio* は以上のことを前口上の話してから、さらにロミオの恋が *blind* だから夜の闇こそふさわしいとシャレてユーモラスにエロティシズムを示唆している。

(26) *Romeo*. Two of the fairest stars in all the heaven,

*Having some business*, do entreat her eyes

To twinkle in their spheres till they return.

—ACT II, sc. II, ll.15-17.

(26)では副詞句といえる分詞構造（いわゆる分詞構文）の中間派生（mid-branch）を主語と述語との間に挿入句として割り込ませている。中間派生はこのように短めがよい。主語 Two が述語動詞 entreat と収斂しやすくなるからである。

## (B) 節

英語の節 (clause) は重文 (compound sentence) や複文 (complex sentence), 混文 (mixed sentence) 中に存在する。重文は散列文 (loose sentence) の基本形式といえる。複文と混文には従属節がある。従属節を前置（先行）させた文は掉尾文 (periodic sentence) の基本形式といえる。例えば *Romeo and Juliet* 中にシェイクスピアが用いた重文, My ears have yet not drunk a hundred words Of thy tongue's uttering, yet I know the sound. (*Juliet*, p.130) では, コンマのあとの等位接続詞 (coordinate conjunction) yet (=but) を境に, 前半と後半を形式上同じ重要度の節としておいている。また, 複文の例として, I would not for the world they saw thee here. (*Juliet*, p.130) では, 従節 they saw thee here の部分が主節 I would not の目的語となっている名詞節である。さらに混文 (=重複文) の例, The orchard walls are high and hard to climb, And the place death, considering who thou art, If any of my kinsmen find thee here. (*Juliet*, p.130) では, まず, 副詞節 (従節), If any of my kinsmen find thee here があり, 接続詞 And のあとに is を導入して the place is death とすれば, ここに等位節が浮き彫りになる。

### 1 名詞節

(27) *Romeo*. I would I were thy bird.

(27)では従節 I were thy bird が主節 I would (=I wish) の目的語となる名詞節である。この名詞節というのは意味論 (semantics) 的には1つの抽象概念を構成する。be動詞 were は仮定法過去である。主節 I would の would は本動詞である。例えば, Would that I were young again. のように従位接続詞 that を表現することもある。さらに, I would thou wert so happy by thy stay To hear true shrift. (*Montague*, p.90) のような例も見られる。この発話では, I would (=I wish) が主節で, thou wert so happy by the stay は他動詞 would の目的語となる名詞節である。I would + 従節は I would that + 従節とも表現するが, いずれも古風な (archaic) 用法である。

(28) *Nurse*. Do you not see that I am out of wealth?

—ACT II, sc.v, l.29.

(28)では that 節が see の目的語となる名詞節である。ここで Nurse はていねいに従位接続詞 that を入れて話している。さらに, O, then I see that mad men have no ears. (*Fiar Lawrence*, p.177) という表現も見られる。別の例としては, I see thou knowest me not. (*Romeo*, p.161) や My lord, I

would *that Thursday were tomorrow*. (Paris, p.184) などという表現も見られる。

(29) *Juliet*. I' faith I am sorry *that thou art not well*, —ACT II, sc.v, l.53.

(29)では *that* 節は *am sorry* の目的語になっている。be + 形容詞で他動詞相当語句とみる。また、形容詞 *sorry* を修飾する副詞句とも考えられる。*sorry* は叙述形容詞であり、現代英語では、*sorry* のあとの接続詞 *that* を口語表現では省くことが多い。さらに *Right glad I am (=I am right glad)* *he was not at this fray*. (Montague, p.88) の例では、*he was not at this fray* の直前に従位接続詞 *that* を導入できる構文である。そしてこの *that* 節は *am glad* の目的語となる名詞節である。現代英語でも、*I am glad that the merchant has come*. のように用いる。

(30) *Prince*. And here he writes *that he did buy a poison of poor 'pothecary*, ....

—ACT V, sc.Ⅲ, l.287.

(30)では *that* 節が *writes* の目的語となる名詞節である。さらにはまた、*Meantime I write to Romeo That he should hither come as this dire night To help to take her from her borrow'd grave, Being the time the potion's force should cease*. (Friar Lawrence, p.233) のような表現も見られる。いずれも動詞 *write* の目的語ということで、書くことの内容を *that* 節内で述べている。

(31) *Servant*. It is written *that the shoemaker should meddle with his yard, and the tailor with his last, the fisher with his pencil, and the painter with his nets*, ... —ACT I, sc.Ⅱ, ll.38-41.

(31)ではいわゆる *It ~ that* 構文が使われており、予備の *it* に対し *that* 節が真主語の名詞節である。論理的にはこの *that* 節を仮主語 *it* の位置に、つまり文頭に移しても英語構文としては成り立つが、*that* 節という長い主語になり頭位過重 (front-heavy) の重々しいアンバランスの文となる。*Servant* は *is written* という受動態の文を使い、客観的 (objective) な述べ方をしている。さらに、*'Tis well thou art not fish; ...* (Gregory, p.83) のような例も見られる。この表現では *thou* の直前に従位接続詞 *that* を導入することができる。そして *'Tis (=It is)* の *It* は予備の *it* で *that* 節を指す。例えば、*That she will go abroad is certain*. の文では、形式主語 *it* を文頭におき、*that* 節を後置して、*It is certain that she will go abroad*. と表現する方がバランスがとれて、現代英語では好まれている。

(32) *Mercutio*. O Romeo, *that she were*, O *that she were An open arse and thou a popperin pear* !

—ACT II, sc.Ⅰ, ll.37-38.

(32)では *I wish* を2つの *that* 節の前に導入した文、*I wish that she were ... !* という祈願文の意味である。つまり、*that* 節は *I wish* の目的語となる名詞節である。be 動詞 *were* は仮定法過去の表現である。さらに、*Romeo* の言葉として、*O that she know she were ! (=I wish that she knew she were my love.)* (p.127) という表現もみられる。

(33) *Romeo*. ... ; but this I pray,

*That thou consent to marry us today*,

—ACT II, sc.Ⅱ, ll.59-60.

(33)では後述照応 (cataphora) の用法の *this* を目的語に用い、この *this* は *That thou consent to*



marry us today という That 節 (=名詞節) を指している。this を用いずに I pray that thou consent to marry us today. ともいえるが、this をおくことで相手の注意度を高めている。pray という動詞は本来、文章語ないし文語として、例えば、I pray that you and your mother will come. のように表現する

(34) *Romeo*. I dreamt my lady came and found me dead— —ACT IV, SC. I, 1.6.

(34)では主節 I dreamt をまずおき、my lady came and found me dead がその目的語となる名詞節である。他動詞 dream のあとは一般に that 節がくるが、ここで Romeo は接続詞 that を省いて表現している。現代の改まった英語 (formal English) の例では、she always dreams that she will be a flight attendant. のように用いる。

## 2 形容詞節

(35) *Romeo*. Show me a mistress *that is passing fair*; —ACT I, SC. I, 1.232.

(35)では、that is passing fair が人間名詞 mistress を修飾する形容詞節である。mistress を先行詞とする that は主格の関係代名詞である。この that によって文を拡大している。主節は命令法である。

(36) *Romeo*. He *that is stricken blind*, cannot forget

The precious treasure of his eyesight lost. —ACT I, SC. I, 11.230-31.

(36)では主格の関係代名詞 that で始まる節 (that is stricken blind) が人称代名詞 He を修飾する形容詞節である。先行詞が人間 (He) なので関係代名詞 that を用いている。

(37) *Friar Lawrence*. But he *which bore my letter*, Friar John,

Was stay'd by accident and yesternight

Return'd my letter back. —ACT V, SC. IV, 11.249-51.

(37)では which bore my letter が人称代名詞 he を修飾する形容詞節である。このように当時は which の先行詞が人間の例も見られる。

(38) *Romeo*. Alas that love *whose view is muffled still*

Should without eyes see pathways to his will! —ACT I, SC. I, 11.169-70.

(38)では所有格の関係代名詞 whose で始まる節 (whose ~ eyes) が形容詞節として先行する抽象名詞 love を修飾している。関係代名詞による文の拡大ある。そして that ~ eyes が see の無生物主語として pathways を見るという構文である。無生物主語の表現は客観性を表出する。主語と述語の中間への挿入節の形式をとっている。

(39) *Prince*. Benvolio, who began this bloody fray?

*Benvolio*. Tybalt, here slain, *whom Romeo's hand did slay*. —ACT III, SC. I, 11.153-57.

(39)では whom Romeo's hand did slay が固有名詞の人名 Tybalt を修飾する形容詞節である。

(40) *Tybalt*. Boy, this shall not excuse the injuries

*That thou hast done me*, therefore turn and draw. —ACT III, SC.I, ll.65-66.

(40)では *That thou hast done me* が *this injuries* を修飾する形容詞節である。目的格の関係代名詞 *That* は *the injuries* を先行詞として指す。このように目的格の関係代名詞 *that* も省いてない。

(41) *Romeo*. This love *that thou hast shown*

Doth add more grief to too much of mine own. —ACT I, SC.I, ll.185-86.

(41)では関係代名詞 *that* で始まる節 (*that thou hast shown*) が先行する名詞 *love* を修飾する形容詞節である。主節の主語と動詞の間に派生させた節である。主節は無生物主語の構文である。

(42) *Juliet*. ...; therefore pardon me, And not impute this yielding to light love

*Which the dark night hath so discovered*. —ACT II, SC.II, ll.104-06.

(42)では *Which the dark night hath so discovered* が *this yielding* を修飾する形容詞節である。*Which* により文を拡大している。目的格の関係代名詞 *Which* は *this yielding* を指す。*Which* の先行詞はその直前の *light love* ではなく、*this yielding* である。*not impute* は命令法とみられる。

### 3 副詞節

(43) *Gregory*. I will frown *as I pass by*, and let them take it *as they list*.

—ACT I, SC.I, ll.38-39.

(43)において、最初の副詞節 *as I pass by* では接続詞 *as* は *while* ないし *when* の意味である。2つ目の副詞節 *as they list* (=want) は1つ目の *as* の用法とは異なる。この接続詞 *as* は様態を表わし、「～ように」の意味である。*and* を境に前半と後半に複文形式をおくが、主節を先行させる複文なので文意の理解は比較的容易である。等位接続詞 *and* により節を結んでいるので、全体的には混文 (=重複文) を構成している。

(44) *Benvolio*. I aim'd so near *when I suppos'd you lov'd*,

—ACT I, SC.I, l.203.

(44)では副詞節 *when I suppos'd you lov'd* を主節のあとにおいた平明な表現である。この *when* 節はさらに主節+従節がある。*when* 節という大の従節と *you lov'd* という *suppos'd* の目的語の小の従節がある構文である。従節が二重構造をなしている。

(45) *Friar Lawrence*. And she, too desperate, would not go with me But, *as it seems*, did violence on herself.

—ACT V, SC.III, ll.262-63.

(45)では *as it seems* が1語の副詞 *seemingly* とか *apparently* の意味の独立した副詞節として、主語と述語の間において、文全体を修飾している。この用法は少し珍しい例である。

(46) *Prince*. *If ever you disturb our streets again*, Your lives shall pay forfeit of the peace.

—ACT I, SC.I, ll.94-95.

(46)では副詞節 *If ever you disturb our streets again* を前半におき、この条件文の内容 (法律違反事項) を心持強調している。そして主節で極刑に処す旨を強調している。

(47) *Romeo. Had I it (=my name) written, I would tear the word.* —ACT II, sc. II

(47)では前半の *Had I it written* は *If I had written it* という仮定法過去完了 (Subjunctive past perfect) の構文である。現代では *If I had it written* というふうに表示する方が口語的である。だが主節は仮定法過去という変則的な形である。

(48) *Juliet. If that thy bent of love be honourable, Thy purpose marriage, send me word tomorrow....*

—ACT II, sc. II, ll.143-44.

(48)では *If that (=If)* という群接続詞 (group conjunction) に始まる仮定法現在の副詞節である。原型の動詞 *be* を用い、現在の単なる推測を表わしており、今日では文語的 (literary) な表現である。

(49) *Juliet. Good night, good night. Parting is such sweet sorrow*

*That I shall say good night till it be morrow.* —ACT II, sc. II, ll.184-85.

(49)ではまず *That I shall say good night* が結果節としての副詞節である。さらに *till it be morrow* が、*I shall say good night* を主節とみて、重層的にその従節としての副詞節となっている。文全体としては複文 (complex sentence) であるが、主節を先行させて、比較的平易な口語表現である。ついでながら主節の *Parting is such sweet sorrow* においては *such sweet sorrow* が [s] 音の頭韻 (alliteration) をなしており、快音 (euphony) を創出している。それゆえに後半の従節への思考の流れも円滑に移行しているように思われる。

(50) *Friar Lawrence. Care keeps his watch in very old man's eye,*

*And where care lodges sleep will never lie.* —ACT II, sc. III, ll.31-34.

(50)では *And* を境にして後半に *where care lodges* という副詞節をおき、最後に主節 *sleep will never lie* をおいて言葉を結んでいる。文全体としては混文 (mixed sentence) を構成している。文頭に無生物主語 *Care* を、また *where* 節中の主語にも *care* を用いている。文の前半と後半に同一主語 *care* をおく表現は文の流れが良い。

(51) *Juliet. I gave thee mine before thou didst request it,* —ACT II, sc. II, l.128.

(51)では *before thou didst request it* が主節 *I gave thee mine (=my vow)* を修飾する副詞節 (従属節) として機能している。*before* 節をおくことによって、主節の与格動詞 (dative verb) *give* の積極性 (positiveness) を示している。

(52) *Romeo. I'll tell thee ere thou ask it me again.* —ACT II, sc. II, l.144.

(52)ではまず主節をおき主旨を述べ、*ere (=before)* で始まる副詞節で文字通り従属的な意味のことを述べている。典型的な複文構造である。従位接続詞 *ere* は今日では古風 (archaic) とされ、定型詩に見られる程度である。

(53) *Romeo. I do protest I never injured thee, But love thee better than thou canst devise Till thou shalt know the reason of my love.* —ACT III, sc. I, ll.67-68.

(53)では *than thou canst devise (=imagine; understand)* が主節 *love thee better* に対する従属節で

あり、主節 *love thee better* を修飾する副詞節である。さらに、*Till thou shalt know the reason of my love* が副詞節として従属し、*love thee better than thou canst devise* という複文構造を修飾している。前半に主節をおいて中心主題を述べ、後半に大小の従属節（＝副詞節）をおいて付加的な内容を述べている。したがって相手に自然に理解されやすい。

(54) *Nurse. Then, since the case so stands as now it doth, I think it best you married with the County.* —ACT III, sc.v, ll.216-17.

(54)では *since* 節（従節）を先行させて、一応事情にふれてから *Nurse* は自分の主張を述べている。*since* 節は *because* 節のように直接の因果関係をはっきり示すのではなく、軽く推論の根拠を表わすだけである。*Romeo and Juliet* ではこういう *since* 節をあまり用いていない。*because* もあまり見られない。むしろ今日古風な等位接続詞 *for* をかなり頻繁に用いている。この *for* は当時は口語的用法であったものと考えられる。

(55) 2 *Musician. I say 'silver sound' because musicians sound for silver.* —ACT IV, sc.v, l.130-31.

(55)では *because musicians sound for silver* を後置している。*because* 節で直接の因果関係をもつ理由を述べている。*musicians sound for silver* は *musicians play music for money* の意味であり、金銭欲のことである。音楽家なんていうのは、ちりんちりん鳴る銀貨が欲しさに音楽を演奏するのだと言っている。

(56) *Nurse. Come let's away, the strangers all are gone.* —ACT I, sc.v, ll.144.

(56)では前半の節で *Come let's [go] away* と述べ、後半の節ではその直接の理由を述べているので、後半の節頭に *because* を導入して、*because the strangers all are gone* と言えるところであるが、口語表現では理由を表わす接続詞 *because* を表現せずにすませてしまうことが多い。

## おわりに

以上の通り、小論ではシェイクスピアにおける英語表現としての句（phrase）と節（clause）を分析・検討してきたが、劇作家・詩人としての言語感覚の明晰さや知的な文章構成法に驚嘆させられる。文（sentence）には下位区分として節や句がある。しかし言語表現は必ずしも完全文（full sentence）によってのみなされるわけではない。主語（subject）＋述語（predicate）の形式を整えていない不完全文としての断片文（fragmentary sentence）ないし小文（minor sentence）と呼ばれるものがある。シェイクスピアは劇曲中において、当然ながら断片文をよく用いている。それが自然な表現である場合が少なくないからである。

まず句であるが、*Romeo* が名詞句を並べただけの述べ方をしている場合がある。主語＋述語の関係をそなえていないがそれで十分コミュニケーションを果たしているのである。限定詞 *this* ＋名詞を同格的に並べて主格におき、隠喩的表現を入れてイメージを明確にしている。*A dog* の次に後置修飾的に形容詞句として、*of the house of Montague* を置き、*dog* は隠喩としてモンタギュー

家の召使のことで、軽蔑してそう呼んでいるわけである。

また *Down with the Capulet!* においては動詞を含まない、副詞句のみの命令文（断片文）である。*Benvolio* が、*Have you importun'd him by any means?* と *Montague* にたずねると、*Montague* は、*Both by myself and many other friends* と答えている。副詞句のみによりコミュニケーションを行なっているもので、これがこの会話では自然（natural）なのである。

文章構成において、8品詞のうちで名詞と動詞が最も重要な働きをする品詞である。その意味で名詞句や形容詞句、副詞句は簡略な構造であるが、時に暗示力に富み、時に曖昧にもなりかねない。だが節構造では動詞を含み、生き生きとした表現を創出する。*Romeo* が *I would I were thy bird* と *Juliet* に言っているが、これは現代英語で *I wish I were a bird* を連想させる。名詞節 *I were thy bird* において *be* 動詞の複数形 *were* が仮定法過去の決め手である。

シェイクスピアは無生物主語をよく用いている。*Romeo* が *This love that thou hast shown* *Doth add more grief to too much of mine own* と *Benvolio* に言っている。形容詞節 *that thou hast shown* が無生物主語 *This love* を修飾している。*Thou hast shown* が *love* を限定することにより、*love* は逆説的に *grief* をもたらしている。

現代アメリカ英語において、*as* 節は曖昧になりがちだというので、理由を表す場合に *because* を用いる方が多いが、シェイクスピアにおいても、すでに *as* 節の多義多様な用法が見られる。接続詞 *as* には *when (while)* の意味や *because* その他の意味があるが、*And she, too desperate, would not go with me But as it seems, did violence on herself.* という文中の独立節 *as it seems* の接続詞 *as* は様態を表わし「～ように」の意味である。こうして副詞節は副詞句と同様に文に彩りを添える役割を果たすものである。

シェイクスピアの筆力、文体的表現力の絶妙さ、巧みさ、深奥さは天才的なものがあり、21世紀の今日なお他の追従をゆるさない。シェイクスピアの戯曲の文体は西脇順三郎が述べているように口語と文章語の中間的なものと言えよう。当時の話し言葉を中心とした英語で表現しながらも、決して単なる通俗的な卑俗な英語に堕することなく、ユーモアを湛え、詩的とさえいえる文体力を発揮し保持している。初期近代英語として、シェイクスピアの英語はあらゆる構文様式を備えている。その点で、20世紀では D.H. ロレンスが小説の文体として多種多様な構文を駆使して表現している。シェイクスピアの戯曲は、その英語の意味内容とあいまって、英語の句（phrase）や節（clause）の構成力が優れているから、名せりふとして人口に膾炙し、名言として後世に残っているといえよう。

## 注

- (1) テキストは *The Arden Shakespeare* の *Romeo and Juliet* を使用した。